

伊香保志

卷三  
上

⊗

i 62

49254

Ik

3

No. 2150  
12 62



富士川文庫

2723

伊香保志下卷目錄

○舊事

村民八氏の事

木暮氏古文書

○附録諸書抄出

萬葉伊加保歌并解

北國紀行

東路の裏

伊香保のみちゆふぶき

赤城紀行

伊加保の古歌

宗祇終焉記

山吹日記

伊香保道の記

登榛名山記

伊香保志

天香樓藏

遊船尾伊香保記

更衣日記

仁泉亭記

○ 林内八代...  
○ 伊香保志下巻目録

下目單



伊香保志下巻

東都 秋萍居士 輯

舊事

土人傳へ云人皇十一代垂仁天皇二年伊香保山温泉涌出...  
古くより伊香保と稱し...  
中世も桃井の郷伊香保の北の稱...  
廣くはしりて又そのりみそ伊香保の神の神領ありて是利氏の世

伊香保志

天香樓藏

上杉氏山の内 當國の守護にして平井城子居て鎌倉の管領と  
 為りその長臣長尾氏と守護代として白井城に居居むその頃この  
 地の地を長尾氏子屬し天正年中 後小田原の北條氏に屬し天正  
 十八年徳川氏關東より移居し後井伊氏初箕輪子城し後 の領とあり寛  
 永九年より徳川家直領となす當國岩鼻代官所の支配とあり承  
 應三年改めて檢地あり村高二百四十石餘子定められ悉く公租申  
 付後元禄五年より十四戸の 又伊香保の沼を元來當村子屬し沼  
 の西ある大神峠と村界やせしり寛文六年沼と小富士との地は就き  
 地界の公事起り榛名山別當より官へ出願し趣り沼をその頃官よ  
 り沼と榛名の神の御手洗池や命じり沼の地を榛名山屬する

下ノ一

近之を慶應二年より岩鼻より代官と郡代より改め  
 られ明治元年六月より岩鼻縣の管轄とあり同年十一月より前橋  
 藩より移り明治四年十月より群馬縣となり六年六月廢縣して  
 熊谷縣に移り九年八月より群馬縣の管轄となれり  
 此の温泉垂仁帝の世より開けたりと言ひ傳ふまじきその浴場は後  
 け人の來り浴みするごとくを後世に何所の後よりありん知らまじき萬  
 葉以下代の歌集より伊香保の名を見ゆれど湯の事を見えん此の  
 湯の事の書に出でたる初めを北國紀行より文明十八年足利將軍義満 竟  
 惠法印一七日此湯より浴せし事見え又宗祇終焉記より文龜二年  
 將軍義連連歌師宗祇 此湯中風の病によりてを入居ること見えたり

二書の文流 その流を夙々湯治する地をなをて久しきこと知られ  
 たり又その頃人家を今の湯元の地より引寄せ天正四年に今の地より  
 移りたるも言傳ふ 末の仁泉亭記 近き世をふめてを此湯の奇効  
 ありと愈せり 頭より本を浴する人年と多き韻人学士の紀行  
 ありと多し 其二三と摘録しを 殊に近年泉質の分析ありて希代乃  
 名湯たること高き世より知られ縉紳貴顕の人此より遊び且を病  
 せ養ひ且を暑を避くること年と追ひ盛なり 特に 明治十二年春を  
 とも 皇太后宮此温泉へ行啓せらる七月十七日東京と立たせ  
 給ひ御道筋中仙道より寄り湫川と歴て廿日當所へ着御りり木  
 暮八郎の家で假の御旅館と定むらる供奉の女官に典侍萬里小路幸子

下ノ二

掌侍錦織隆子 命婦 権掌侍鴨脚頼子 命婦 官員に皇太后皇太夫萬  
 里小路博房宮内大書記官香山敬三三三侍醫竹内正信其外近衛尉官  
 宮内判任官等以下凡供奉の者百餘人あり廿二日向山へ遊歩せせら  
 る八月二日此を出立せたるひ湫川より前橋を過ぐる東系へ還御を  
 せしむるも此の温泉の申も畏き面目を尚千百年行くと名盡  
 きぬ榮ありんば 御逗留の中より落雷ありしを未系より避雷柱と取寄せ  
 後よりいげたる伊香保の道ゆきふらに萬葉集にも伊加保の雷と詠み  
 せ記せりされど常工を落雷少しと土人をソノ事

村民八氏の事

當村民の古より住居する者を木暮岸、島田 以上三氏を各 大島千明、  
 永井後閑、福田の八氏に本末合せを十四戸あり土令れを大屋と稱

上當村と高二百四十餘石并山林等土地所有の民を此十四戸に限  
 まりその外古より譜代門屋と稱する者八十四戸ありて八氏の後裔  
 ありて維新の波を一様の村民を多し又他より移り住むる者も有り  
 今百六十餘戸 土地とつづ者も今尚大屋十四戸に限をき  
 八氏の家を大抵天正年中白井の長尾氏の遺臣に後、郷士と考る  
 徳川氏の始當村より三國裏往還の關所中巻に設け村民にて守らしめ  
 岩鼻代官の支配を然とせ給料多く唯槍鐵砲等の武器を給せり此  
 の延享三年丙寅官より帶力改めり是に當村は口留番所なるに依り  
 十三人の者福田氏前の内は年番の者の女を天必帶力と云ふ旨代官伊奈半  
 より申渡され夫を關所の勤め係りとせ尚苗字帶力と維新の初

下ノ三

子至まり又その次を十四家の考常に村内の年寄と稱しその内を  
 福田氏と島田氏の分家權右衛門と稱する者とを除き他の十二家より  
 考二人の年番は名を以て稱し關所を守るなり但し十二家と十二支  
 子當を以ての當きり年を本番とせしを勤めたるも同に入當  
 當村温泉涌口八箇所の中に四箇所を千明氏の所者にして外四箇所  
 を十四家の共有あり泉を導き風呂場を設くるも亦十四家の專有に  
 湯元宿の稱あり泉を引き用ふるに算の樋の口徑各四寸湯の涼  
 各四分の制をし風呂場を家毎より四箇所を定むとす  
 次の文書を文化七年夏江戸助込片所の上倉屋庄九郎といふ者流  
 質の鎧櫃の中より得たるを今の本暮八郎の祖父より送じしもの

あり此の書と徳川氏の始より白井長尾氏の子孫の他國より見ゆる考案  
 國の有川某子その祖先の舊跡古傳と質問せしは谷しりのと見ゆるの  
 文頗長し今伊香保の事に係る所の抄出さるる左の如し長尾  
 氏の遺臣あると證せし

上略 御先祖之被召仕候者之子孫今當國ニ居合候分之名  
 付名跡次候者壹人宛書付進上申候伊香保屋鋪者  
 十二間兼手之名付木暮下總子金太夫同八左衛門岸  
 彈正孫六左衛門岸圖書跡無之大島勘解由子甚右衛  
 門木暮新八跡無之千木良出羽孫三郎左衛門此分皆  
 御譜代相傳之者共白井城廻在郷罷在候今度我等方へ

下ノ四

被遣候御判為見申候處彼者共再三頂戴難有由申候

下略 木暮新八跡無しとられど今の  
 木暮武録と新八跡あり

上毛志新より此温泉取立たるを輝景 白井の長  
 尾氏あり 旗下木暮下總守

岸筑前守外都合十二人ありやりの然まど八氏の内最古き者

千明氏と見ゆ千明古を千木良やも書く湯元の地を古く千明

氏の所有にゆき往時をせまふ家居し文龜の頃連歌師宗祇

千明氏子宿屋室せ仁泉亭を名づけしを即湯元の地とす

の事ありや今湯元に千明元屋敷の稱あり湯の事につ

て千明氏の由緒最重し 現より温泉浦口八處の半を千明氏の有し  
 其寛の營造を千明氏最権あり 仁泉亭の記を據き千百年前を僅かふる村民湯元の

地子位み其地も村民も共々皆千明氏の屬ありに後元龜天正の頃當郡武田氏子屬世時千明氏の嗣子幼くして母老ゆ餘民相謀りて有司子告げ村々今の地に移し温泉の業を営む土人今うす傳へて天正四年武田族地七民子分ち賜ふれりせよふをその時の事なる七民を千明岸、木暮、大島、後閑、望月、今永井氏、島田、再分れく十四戸を各各寛以を温泉と引く官又寛の法を定め千明氏致し世々寛の事と司らるる源の地その所有なきを云々云々、仁泉亭祀、然もやまの流次の木暮氏の傳ふる所と異あり併せ見ふし次子岸氏の祖先を往昔伊香保神社の神主ありしを以てその祖某の墓今子神社の側に在り又天正の頃岸

筑前介安兼、河原で醫王寺を開基す、紫ざらち古とそ千明氏温泉の地也有し岸氏神社を守臣のそありしを永祿中武田氏當國を役へしうち西氏武田子屬し天正中子至りて餘の五氏外より表まで共々此の地を賜り武田滅び後子七氏共に長尾氏子従ひ、大島氏を新田郡大島村より出を新田氏の支商ありしを以て、安永年中高山彦九郎が大島氏を訪ひを系圖調べし事あり、赤城紀行に、島田権右衛門の家を後子分ち福田氏も後、興きり家見えし、或云く、島田平、當村往年より屢火災ありを各家に白ありと、以て、或云く、島田平、當村往年より屢火災ありを各家に白その舊記を失ひ、文書の徴をば、但し木暮八郎の家子僅に、救通の古文書系圖等を存せり、據りてを成、揖めを左子記す、木暮氏を、村上源氏より、赤松、その祖、下、総守、祐利と云代、伊香保村子、住居、此、この地を領を、祐利、天文年中、當國、平井の上杉氏より



後ひた置に天文二十年上杉氏滅亡の後母方の祖父より箕輪乃長  
 野業政中巻の箕輪の部見ふべしを申合せたより武田信玄箕輪を亡り、後  
 を武田家より後ひ天文四年丙子四月祐利入道し武田勝頼より法名  
 成存真式を存心と名まじり、同十年武田家亡び、成存真その子  
 下総守祐行を共子白井の長尾輝宗入道成玄子居し持高の地を  
 所務し、當村の支配申し付り入澤口阿久津村の地を  
 了三拾貫文を安堵し騎馬六騎足輕三十人召具し軍役を勤む白  
 井落城の役を小田原の北條家と申通じその後天文十八年徳川家開  
 東より移りし時忠即し同年井伊直政箕輪の城主とあり此地の  
 地を領せり及び存真父子を客分よりいり、陣が陣の対直政の所望

子但せ祐行の次男藤太郎を直政が子に屬けて出陣せむ井伊氏近江の  
 佐和より移り後近江國犬上郡大尾子村より知行二百石與り直の一字給  
 たり名を直信とす、後大坂を陣の時井伊直孝に役ひて武功あり、  
 後父老より故郷より近江へ呼迎へんとす、代々居住の地より難く後  
 兄を早世し父も歿し、直信井伊家を暇とてひそそ伊香保へ歸り家  
 代相續し、浪令をある然るに由緒の家のあし、郷士にむらり、騎馬足  
 輕召具し軍役勤むべき旨申渡され代々用意急ふ、遂に存真を祐行  
 子家へ譲り、天文十六年十一月薬師堂屋敷今の八郎の屋敷ありに隠居す  
 祐行が次男藤太郎直信家を継ぎ改めを金太夫と稱し三男藤次郎祐  
 直を祖父が隠居の後にお續し、名を八左衛門と改め、今八祐直の次男新

八郎別家<sup>つらけ</sup>武大夫<sup>ぶたふ</sup>を改稱<sup>かへしやう</sup>し今<sup>いま</sup>武<sup>ぶ</sup>此<sup>こゝ</sup>の三家<sup>さんか</sup>代<sup>しろ</sup>とその名<sup>な</sup>を継<sup>ついで</sup>ぎて今<sup>いま</sup>不至<sup>いたらず</sup>その寛永<sup>かんえい</sup>九年<sup>くねん</sup>當<sup>あた</sup>村<sup>むら</sup>代<sup>しろ</sup>官<sup>くわん</sup>文<sup>ぶん</sup>配<sup>はい</sup>とあるし以来<sup>いらい</sup>を百姓<sup>ひやくしやう</sup>並<sup>なら</sup>の姿<sup>すがた</sup>をふゆ也<sup>なり</sup>歎<sup>なげ</sup>ま直<sup>ちか</sup>信<sup>のぶ</sup>の子<sup>こ</sup>直<sup>ちか</sup>盛<sup>のぶ</sup>寶<sup>たから</sup>永<sup>えい</sup>三年<sup>さんねん</sup>先<sup>せん</sup>規<sup>き</sup>のめく地<sup>ぢ</sup>士<sup>し</sup>とあり騎<sup>か</sup>馬<sup>ば</sup>足<sup>あし</sup>挫<sup>く</sup>つ軍<sup>ぐん</sup>紋<sup>もん</sup>を勤<sup>つと</sup>めんこと城<sup>しろ</sup>出<sup>で</sup>願<sup>ねん</sup>世<sup>よ</sup>奉<sup>ほう</sup>ありその後<sup>のち</sup>延<sup>えん</sup>享<sup>きやう</sup>三年<sup>さんねん</sup>當<sup>あた</sup>村<sup>むら</sup>關<sup>せき</sup>所<sup>しよ</sup>當<sup>あた</sup>番<sup>ばん</sup>二人<sup>ふたり</sup>の考<sup>かう</sup>めを帶<sup>た</sup>刀<sup>とう</sup>をまきり定<sup>さだ</sup>められして依<sup>よ</sup>り寶<sup>たから</sup>曆<sup>れき</sup>五年<sup>ごねん</sup>因<sup>よ</sup>八年<sup>はちねん</sup>兩<sup>りやう</sup>度<sup>ど</sup>再<sup>また</sup>先<sup>せん</sup>規<sup>き</sup>のめく出<sup>で</sup>願<sup>ねん</sup>せしかが免<sup>めん</sup>許<sup>きょ</sup>無<sup>く</sup>し先<sup>せん</sup>祖<sup>そ</sup>存<sup>ぞん</sup>真<sup>ま</sup>入<sup>に</sup>道<sup>だう</sup>隱<sup>いん</sup>居<sup>い</sup>の所<sup>しよ</sup>自<sup>みづか</sup>携<sup>か</sup>へたるを見<sup>み</sup>えそ古<sup>こ</sup>文<sup>ぶん</sup>書<sup>しょ</sup>數<sup>かず</sup>十<sup>じゆ</sup>通<sup>つう</sup>今<sup>いま</sup>皆<sup>みな</sup>八<sup>はち</sup>郎<sup>らう</sup>が家<sup>け</sup>に傳<sup>つた</sup>へたり今<sup>いま</sup>その内<sup>うち</sup>を摹<sup>も</sup>寫<sup>しやう</sup>しを掲<sup>か</sup>げこの外<sup>ほか</sup>木<sup>き</sup>暮<sup>ぼ</sup>氏<sup>し</sup>一<sup>いつ</sup>族<sup>しやく</sup>より尚<sup>なほ</sup>文<sup>ぶん</sup>書<sup>しょ</sup>刀<sup>たう</sup>劍<sup>けん</sup>の類<sup>るい</sup>許<sup>あま</sup>多<sup>おほ</sup>傳<sup>つた</sup>へたりしが代<sup>しろ</sup>の敷<sup>しき</sup>度<sup>ど</sup>の火<sup>ひ</sup>災<sup>さい</sup>より失<sup>う</sup>せ今<sup>いま</sup>を傳<sup>つた</sup>むらば

下ノ七

八

木暮祐利入道スル時  
武田勝頼ヨリ與ヘラレ  
シ法名ナリ朱印奇草  
リ勝頼ノ印ト見エタリ  
原書ハ大奉書紙横ニ  
折中央ニ此名ヲ書シ末  
二年月ヲ書ス大サスベ  
テ圖ノ如シ今縮メ寫ス



存真

天保六年

伊香保

大如圖  
力以年之秋成今刀

一勝到系在秋以何

一振きくん表秋詞

計一いりま河安層有

てりくくはく

心りくく勝頼



印朱ナリ

此勝頼ヨリ與ヘラレシカハ左  
文字ナリト云フ今傳ハラス真田安  
房守昌幸ハ沼田ノ城主ナリキ

存真

縮寫二分之一

定

- 一 湯坪 并持高之事
- 一 大瀧之事
- 一 酒運之事
- 一 入沢口 拾英文
- 一 河之津村 武橋書文

石切前之泉以者也

天正十年

井

了了其輝景也

事書上縁

上州白井城主長尾輝景後二入道  
 レテ威玄ト云入澤口ハ澁川村ノ内ノ  
 字ナリ阿久津村ハ澁川ノ東北ニ有  
 天正十年八壬午ナリ

定

- 一 他<sup>に</sup>可<sup>し</sup>治<sup>す</sup>淨<sup>く</sup>眼<sup>を</sup>与<sup>ふ</sup>境<sup>を</sup>目<sup>と</sup>之<sup>の</sup>間<sup>を</sup>不可<sup>し</sup>
- 一 吾<sup>の</sup>越<sup>え</sup>事<sup>す</sup>
- 一 湯<sup>に</sup>治<sup>す</sup>者<sup>は</sup>有<sup>り</sup>心<sup>を</sup>融<sup>か</sup>境<sup>を</sup>人<sup>を</sup>淨<sup>く</sup>字<sup>を</sup>鑿<sup>す</sup>
- 一 淨<sup>く</sup>善<sup>く</sup>法<sup>を</sup>以<sup>て</sup>書<sup>す</sup>是<sup>を</sup>六<sup>つ</sup>お<sup>の</sup>勅<sup>す</sup>事<sup>す</sup>
- 一 湯<sup>に</sup>積<sup>む</sup>之<sup>を</sup>候<sup>に</sup>成<sup>る</sup>お<sup>の</sup>り<sup>の</sup>事<sup>す</sup>
- 一 亦<sup>も</sup>是<sup>の</sup>地<sup>に</sup>何<sup>れ</sup>事<sup>も</sup>成<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>未<sup>だ</sup>成<sup>ら</sup>ず<sup>に</sup>成<sup>る</sup>

縮寫二分之二

本<sup>に</sup>言<sup>ふ</sup>下<sup>に</sup>結<sup>ぶ</sup>る<sup>に</sup>乃<sup>ち</sup>至<sup>る</sup>也<sup>に</sup>理<sup>を</sup>想<sup>ふ</sup>の<sup>所</sup>は

之<sup>の</sup>候<sup>に</sup>吾<sup>の</sup>想<sup>ふ</sup>に<sup>て</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>心</sup>に<sup>て</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>心</sup>

右<sup>の</sup>書<sup>に</sup>い<sup>ふ</sup>事<sup>も</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>心</sup>に<sup>て</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>心</sup>に<sup>て</sup>一<sup>つ</sup>の<sup>心</sup>

天<sup>正</sup>十<sup>一</sup>年<sup>癸</sup>三月<sup>癸</sup>巳<sup>日</sup>

此文書誰人ヨリ下シヤ詳ナラズ花押モ知レガタシ



縮寫二分之一

宜

伊香保

一 <sup>イッ</sup> 心は遠くても苦用は心若  
 ちやうちむの志を二江行中  
 一 心は遠くても苦用は心若  
 一 及著者は死をうらむをうら

とくふの心は遠くても

右三ヶ条を遠くても宜し  
 廣く科者也何必伴

天正十二

十月日

五

本書中縮寫あり

花押ハ長尾耀景ノナリ

縮寫三分之一

定

一 傳步ハクシ六宮フクビヤ列之レ録レ事

一 突ニ唾ニ唾ニ痛ニ事

一 國貨ニ貨ニ之ニ方ニ事

右三ヶ条出之傳字也

のり伴

傳字ハ是等ノ類ニシテ

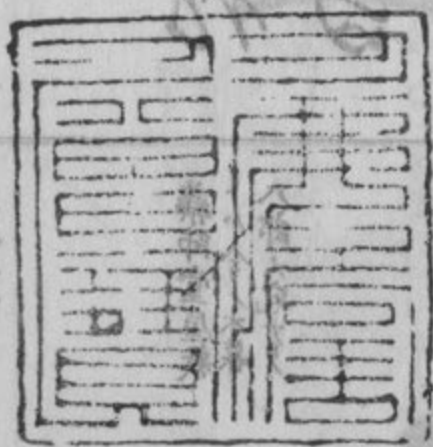
天正十三年

二月六日

本堂下派

此文書何處ヨリ出デタルヤ知ルベカラズ

印 佛法僧寶



二六三三 訓寫

定

藥師堂屋敷  
消痰之山厚取白  
水通之并瀉之  
如得之命之鉄  
炬一挺之走廻者

縮寫  
三分之二

藥師堂屋敷  
十八合ノ木藏  
八郎ノ宅ナリ



可謂之者也似此符

天守六年

十一月六日種彙

種彙

醫書二卷

本草彙



縮寫二分之一

後目言書成中二條抄見所要山依之  
 款月之書級意外以抄中一上意傳方  
 後分白家康書語至度中江乃進・後  
 皇之院今起山江乃又稱獨一合利末  
 表院公於併和伯着下江之乃地之  
 道与現末之乃鯨合今之

十五

二月廿六日

本業下總守  


一合八二匣ナリ 天正十年瀧川一益前橋ヲ去ル  
 後小田原ヨリ 併和伊藤守倉賀野ニ来リ居リ  
 上州ノ事ヲ執行ストアリ 併和伯耆其一族カ

本業下總守  


縮寫二分之一

初り有る事

右上部

合式百名

大尾子松

丑歲略慶長六年辛丑

右文重政ら産所此地也

此端一面と物重保之體也

慶長六年九月十日重政

井伊直政慶長六年二月上州高崎ヨリ近江ノ位和山へ移封セル同七年直政卒シ長子直繼後嗣トシ同九年春佐和山ヨリ彦根ニ移リ同十九年十二月弟直孝ニ家ヲ譲ル木暮藤太郎ノ事ハ本文ニ委シ

本意者そと

縮寫二分之一

佐和山江紙ノ事ハ直政重政接儀

此より大尾松新出乃て此也

慶長六年

平ノ事

右下部

本意者そと

木暮内親

岡本半介井伊家三名高キ家老ノ家ナリ

木暮氏略系

源祐利 木暮下總守  
入道存真  
天正十八年八月朔日歿

祐行 木暮下總守  
實德社勝山城主關口若狹守次男  
室祐利長女

某 木暮弥次郎廿五歲歿

直信 木暮藤太郎後金太夫  
仕井伊家後歸繼家

直盛 木暮金太夫

直定 木暮金太夫  
寶永

祐直 木暮藤次郎後八左衛門  
承祖父祐利隱居別家之後  
正保五年二月八日歿

則藤 木暮又左衛門

則重 木暮八左衛門  
延寶七年十月八日歿

某 木暮新八郎後武太夫  
為叔父直信猶子別家

某 木暮武太夫

○附錄諸書抄出

萬葉集伊加保歌并解

萬葉集十四の卷上野歌の由り伊加保の歌九首あり今左より分  
萬葉考并予橋本直香の萬葉上野歌解よりその大意を解  
く末子伊波保呂安菴  
山子持山の歌を附す

伊加保の雨雲以傍をかぬまつて人ぞおろしむを疾くも見守

るを初めつとく助辭あり以て發語ありかぬまつとく解けは

或云かを發語をを沼則との義を或云加保なり地ありと云を

其地知られず或云東の間の物たる歎とをわらわをわらわす同

しく言ひ騷を義あり見守の女なり

大意を伊香保より雨雲の連續子羣を發つめく汝を故らるる

予人言の騷かろく今を否まをいざや諸やも寝しあ  
と妹等よこりつを

伊加保の垣の榛原より奥の如く今の子をいざや諸やも寝しあ  
岨と山の峙る交あり榛の如く今の子をいざや諸やも寝しあ  
ありといふ説りれを余を取らば説長けま略す

大意を伊香保の岨の榛乃系生ひ茂るをいざや諸やも寝しあ  
奥深く物どか移る思ふと勿き眼のりやなり互くりて未  
を末のよりと今先達せんやを

伊加保のやまの堰より霞の虹の頭より指を指を指を指を  
やとを八尺より深き心もいひ或を彌坂より坂多きをいざや

いひ或を湯坂の堰より今伊香保温泉の地をいざや諸やも寝しあ  
田の水は湛へたてをいざや諸やも寝しあ  
を井出村をいざや諸やも寝しあ  
を井手又やまのやりやくも云此流疑は或を萩原村利根川の  
町守あり各水けり坂のり井のり各敷八のりありといふぬを  
坪の訛頭より頭よりまの訛あり指を指を指を指を指を  
指し交る寝る事なき

大意を伊加保の垣より霞の上より虹のりやなり互くりて未  
を末のよりと今先達せんやを  
ありといふ説りれを余を取らば説長けま略す  
奥深く物どか移る思ふと勿き眼のりやなり互くりて未  
を末のよりと今先達せんやを

しほふの意ありと云ひし

上野の伊加保の沼に植る小水葱は其の根を以て種求むる也

ぬそ之より水葱の水草は今云水乃ひひまりその葉の細き

小水葱やつゝ花此を以て美しく古に植る食用やん

大意をかく意しかくむやてと言ひ初めは遠くとし植るは小

水葱を借る種求むる寄やん

伊加保夫よなつて思ひとる隠るを為つと忘るを為るは

夫をかりし男ありあつてしつひに解き難し集中の難歌あり

とつゝ或云をつてしつをあつて繁にの義飲やとらを雖乃

訛あり隠る隠事には忍び違ふ事あり為るふとを為ぬの延

ひたつたまの

大意を伊香保子人ら思ふ男を吾をあり繁く思へども男

そつゝあとのみまうて訪ひも来ぬその男や忍びくは隠事

女が忘らぬといふ意は

伊加保嶺より雷お啼きを移成方には故を吾とて見守る依るを

大意の伊香保嶺より雷鳴るを勿れ吾の方には何事も無き

妹の怖る依るを啼きてあはれを有る

伊加保風多く日吹くぬ日いつてを我が意の海に時ありあり

大意を伊香保山より吹きぬる風を吹く目も吹くぬ日も

やも吾が人々を驚かすを止む時ほどあり

上野ぬ伊加保の岩より降り雪の行き過を粧ぬ妹が家の河より  
降り雪を降る雪の俚言は雪を行きゆりつけたり

大意を妹が家の雪成行あま心残りを行き過をくぬとあり  
伊加保の岨の榛原杖の巻を着き依りしよ直つと思へを

依りしを依りの延あり榛を皮は物と漆り又若葉は衣  
子摺り著けし漆むれせ摺衣をり

大意を榛の葉を衣に摺り着け漆むれぬ妹が吾子著き  
依りヨマアその妹が心一向におりいしとあり

伊波保の岨のつら根限まよ名君が末まね心もやまぬ  
伊波保とその地様まよ或を伊何保の誤あらん前二首乃

岨の榛原と語と氣同じくあり

大意を伊加保の岨の小松原の外を崖に限りあめく君の  
絶え限まよ末ねを心もやまぬとあり

上野ぬ安藤山者野成度み延のほしものを何れ絶えまよ  
安藤山の解を中巻を出たる葛を延く蔓草せし

大意を安藤山の裾野の度まが故子着の心乃まに遠く長  
く延ひ互ししめ互の中あれを今を如何すとも絶えぬ

子持山より紅葉づまを病を成を思ふ河を何れ思ふ  
子持山を群馬郡の北部中山峠の東より上白井村に屬す即

伊香保の北の正面の小野子山のたけを並びを待たる山あり山  
 頂より大なる岩の形大岩の小岩を抱くが如し子持岩  
 やいひ山子持明神の社より若蛙を嫩楓を紅葉つ  
 まを紅葉するゆを以て春を秋の意をり  
 大意をゆく二人寐てゆく寐ゆくねど春より秋まの久き間や  
 ぢも夫のゆき吾に寐てゆくんとわらふ汝を何ぞ思ふか  
 古今六帖よそ下の句を寐んと  
 思ふと妹の心のをわたり

伊香保の古歌

古歌 吳休の母れんとありそむの沼のいほを思ふ心とのまは 忠岑  
 拾遺 伊の木のやいほの沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 後人  
 下ノ二十

新後 去新神つらつらの木の沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 順徳院  
 拾遺 伊の木のやいほの沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 健家  
 夫木 東路のいほの沼の木の沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 頭中  
 同 伊の木のやいほの沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 行意  
 同 建保百首 伊の木のやいほの沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 家隆  
 同 伊の木のやいほの沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 知家  
 同 伊の木のやいほの沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 行能  
 同 伊の木のやいほの沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 康光  
 同 伊の木のやいほの沼のいほを思ふ心とのまは 今一月らん 為相

〇付くらふびの沼とる科の雲の河津月をやぶる俊成女  
 〇思ふとくゆあのを年の暮に柳すつたの沼のつとく人 共内侍  
 〇石壁よりなる沼とすうぬん侍加保の沼に五月雨の原 忠定  
 〇妙なる沼にすくすくをみるもあまの沼のつとく 涼しき 範宗  
 〇知らぬにれぬ沼にすくすく侍加保風をぬる沼にすくすくをぬる 堯空  
 〇わやめくすくすくの沼のつとくをみるもあまの沼のつとく 道堅  
 〇古崎かたふくすくすくの沼のつとくをみるもあまの沼のつとく せん  
 〇此沼のつとくせんとすくすく侍加保の沼にすくすくをぬる 涼しき 涼美の  
 〇沼のつとくをみるもあまの沼のつとくをみるもあまの沼のつとく 涼美の  
 夫木 〇ちち子なる沼のつとくをみるもあまの沼のつとく 涼美の  
 〇此沼のつとくせんとすくすく侍加保の沼にすくすくをぬる 涼しき 涼美の  
 〇沼のつとくをみるもあまの沼のつとくをみるもあまの沼のつとく 涼美の

下ノ二十一

伊香保風と名噴きつけさくし沼の井沼子なるひまわり肖柏  
 夫木 〇ちち山なる沼のつとくをみるもあまの沼のつとく 涼美の

北國紀行

堯惠法印

上略 越後の府中子越後を略 八月 文明十の末を又旅立つ 略 越後信  
 濃上野の境三國峠より入るを越えて 傳ふ子 略 重陽の日上毛白  
 井とつとくをみるもあまの沼のつとくをみるもあまの沼のつとく 涼美の  
 藤と藤原あり戸部を民部之 即上杉民部大輔藤原定昌と云  
 旅思の哀悔を施さる略 是より 振道を傳ひて 津の温泉子 二十七日  
 傳入子と略 又山中を履て 伊香保の出湯子 移りぬ 略 一七日 伊香保子  
 傳じし出湯の上なる千巖の道とすくすくと 攀ぎ上りて 大なる泉のつとく  
 一方子 傍ひたる高き岩のつとくをみるもあまの沼のつとく 涼美の



ふん伊香保沼といひ... 往跡を尋ね分け登る... 京極黄門の風姿淑く妙あり枯きたる... 根霜を帯びたる... 子交まると杜若の莖... 若あつうとく覚えそ

種し... 伊香保の沼の杜若の掛けし... 神無月廿日あまりに彼の國府長野... 中巻箕輪の陣... 時子... 野... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり

神無月廿日あまりに彼の國府長野... 陣... 時子... 野... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり

野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり

野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり

野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり

野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり... 野に満てり

戸部亭... 九月盡... 長野の陣... 小野頼景... 陣... 暮秋時雨... 十一月の末... 白井の人... 饑別せし... 略... 廿七日山雪... 朝立... 利根川... 遙... 見遣... 略... 明... 三國山... 越... 侍る略

宗祇終焉記

釋宗長

宗祇老人略... 越後の國... 知る... 越後の國府... 至... 略... 年暮... 又... 長月朔日... 越後の國府... 至... 略... 年暮... 又... 奉... 更衣の末... 都... 打

置まは上野國津とりの湯子入るを駿河國子能歸るの  
 由思ひ立ちぬるといへど宗祇老人略の伴ひ侍を略  
 信濃の信濃を打捨て國子歸らんかつみえかほしとつびくくそ  
 路<sup>ダ</sup>路<sup>ダ</sup>の略<sup>ダ</sup>廿六日<sup>文龜二年</sup>二月<sup>あり</sup>のりつ津とりの湯子つまぬ  
 き國子伊香保といふ名所の湯のちゅうふうの考<sup>たわ</sup>をいふと  
 祇を其方<sup>そま</sup>子<sup>こ</sup>趣<sup>おもむ</sup>まきいふとつりありぬ此の湯をいづらひ  
 湯子つらつ車もあつて五月の短夜せしむりしむぬる  
 以<sup>も</sup>つ子<sup>こ</sup>きんゆ<sup>ゆ</sup>はけ<sup>け</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>尾<sup>お</sup>子<sup>こ</sup>亭<sup>てい</sup>うらむ夜<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>志<sup>し</sup>の<sup>の</sup>社<sup>しゃ</sup>と  
 此後宗祇を武蔵子に至りて病甚しく相摸の箱根の湯本子に至りて死す文龜  
 二年七月三十日八十二歳あり門人宗長死せ送るを駿州沼津の黄瀬川の上二里河  
 桃園山定輪寺子葬る宗祇を紀伊の有田郡藤並莊  
 の人飯尾氏より切に律僧とあり連延子長ず

下ノ二十三

東路の裏

釋宗長

略<sup>略</sup>永正六年<sup>八月十日</sup>上野國新田の庄本大澤下總守宿所はして草津

湯治のまのひあつて六七日子あつて静喜に又連歌あり

か<sup>か</sup>衣<sup>い</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>吹<sup>ふ</sup>き<sup>き</sup>を<sup>を</sup>伊<sup>い</sup>香<sup>か</sup>保<sup>ほ</sup>風

か<sup>か</sup>衣<sup>い</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>吹<sup>ふ</sup>き<sup>き</sup>を<sup>を</sup>伊<sup>い</sup>香<sup>か</sup>保<sup>ほ</sup>風

の心<sup>こころ</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>由<sup>ゆ</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>静<sup>せい</sup>溢<sup>いつ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>草<sup>くさ</sup>津<sup>つ</sup>二<sup>に</sup>日<sup>にち</sup>路<sup>ろ</sup>許<sup>こ</sup>

陪<sup>た</sup>大<sup>た</sup>胡<sup>こ</sup>上<sup>じやう</sup>總<sup>そう</sup>介<sup>けい</sup>館<sup>かん</sup>の<sup>の</sup>略<sup>りやく</sup>長<sup>ちやう</sup>月<sup>げつ</sup>四<sup>じ</sup>日<sup>にち</sup>を<sup>を</sup>略<sup>りやく</sup>野<sup>の</sup>山<sup>さん</sup>を<sup>を</sup>過<sup>か</sup>す

青<sup>あお</sup>柳<sup>りゆう</sup>を<sup>を</sup>里<sup>り</sup>の<sup>の</sup>略<sup>りやく</sup>此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>伊<sup>い</sup>香<sup>か</sup>保<sup>ほ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>立<sup>た</sup>寄<sup>よ</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>に<sup>に</sup>の<sup>の</sup>替<sup>か</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>日<sup>にち</sup>を<sup>を</sup>略<sup>りやく</sup>木<sup>き</sup>を<sup>を</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>え<sup>え</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>

替<sup>か</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>日<sup>にち</sup>を<sup>を</sup>略<sup>りやく</sup>木<sup>き</sup>を<sup>を</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>え<sup>え</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>

替<sup>か</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>日<sup>にち</sup>を<sup>を</sup>略<sup>りやく</sup>木<sup>き</sup>を<sup>を</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>え<sup>え</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>

略と云河といふ蓋て松田加賀守法體と云宗繁此十年能あり  
 六のうと言ひのうはゆり八九年の先の年宗祇此路を相伴ひし  
 信濃路跡を例ふとありしに此宿所は廿日餘を逗留懇切の  
 忘を難きを申すありと略

宗長と駿河國益頭郡島田驛の役工の子あり或云近江の北村の父暮年子駿  
 州に住むと駿河の守護合川義忠をば後を僧とあり宗祇を連経と云ふ  
 此書と駿河より白川の瀬で見んとと旅せる紀  
 行あり享祿元年三月十六日八十五歳歿す

山吹日記

目下部高秀

箕輪の故城跡西門の跡りり空堀三重櫓臺西南を流し山川廻る  
 流る内郭の間石二つありと云 矢原村 柏水箕輪の間に 龍門寺を業平於臣

下ノ二十四

のさすらひ住るひし所ゆいんを長野氏をその末葉の 箕輪の

城跡より東の方八町許に椿名大神宮あり石室の上を宮居立

屋と見ゆ式は椿名やいんを椿名の方ゆきんり神名帳の頭注

に椿名椿名一山と関ゆ 此奉後前之三神の辨の部より論せり 椿名石神村の島中

子忠懐忠存の墓ゆの建武の改此三人吉野の御味方頼印を

上巻の地也 是利方より斯より戦ひ兩人討死せしは英皇と傳ふ

椿名大明神を元湯彦命やも満行將軍やも埴安太神とあり

元湯彦命と申す御名を大成經より出たる説をいひしを

見ゆ式を用ひし満行將軍の名もを聞く聞えしを

埴安太神と申すをいひしをいひしをいひしをいひしを

慈悲心鳥の亭を著しく聞くと、榛名の沼に至る古の伊香保の沼ありてし沼の江をたぐりて墓の標あり是を若狭野郡の木部河某のつやひける人の此沼に身せ沈めたるが墓あり古ま標を水に入て失せしを再作せしと云ふなりといふ古石を古まやうありしが善く見ゆて明德の二字あり此二ツの墓事跡誤を中巻とせん 氷室岳の傍に岩垣山といわりぬるそのかえり池あり座主の池より頼印座主の住みし所ゆゑ岩垣沼とよまじし所なりと思へ古殿ありてあるも打たせたるやうに多し是所の名も古まと思へる湯前明神と拜み奉るなり伊香保の神社ありて水澤の左

下二十五

船尾山をびんたり傳教大師の開基はと方を大寺河に於て兼介胤正攻め止がしとて今を寺は 有馬村に甲波宿禰の社あり御旅所あり

日下部高秀、字東進、仁良齋と号す通称を今條貞右衛門寶曆元年歿す塙保己一を此人と學びしとあり此山吹日記原本手に入ら今上野名跡志の引く所也抄出す

倭文女

伊香保の道ゆきあり上毛野の伊香保より出湯ありて母やじ乃たづのじ寛延三年三月十一日 又女やまのいりぬく覚ゆるわらうと送り聞えを以て風をさるしれよすを雪も消ぬりうといふをまじしとて暑日なる瀬

川と云川神流川を武蔵と上野の間は雲々の遠方の雲々...  
を見ゆるを信濃なる沙間の岳や志の友に依る依加保原...  
神さびしき... 指をまき... 巖まき... 峰の山を...  
しもゆ... 見知らぬ... 舟も... 舟も... 舟も...  
何れ... 岳を... 烟も... 伊香保の沼と...  
... 此大神の... 洗... 舟の...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...

... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...  
... 舟も... 舟も... 舟も... 舟も...

三月雨風烈し物騒じ心地もさう雷も甚く多し  
 早出でたるを思ひけね打撃も堪へねど  
 たうさふ歌のうんとも何やも思ひけね  
 ぞ失せぬると思へるを暫くの間  
 づり落ちたれを程とりて思ひぬ  
 ぐさきやともあえさといふも端を出て見られた  
 目もけさるうにほろろのまよふこそ物悲し  
 ぬさどわくと啼り出づるをさやて家の長の位も  
 めるにもさかへせたまる心地やする申の時  
 ほれど名残もなき物悲しうとねん心地もせ  
 下ノ二十七

寒き夜もあれど大きき平るる月もさう  
 左らの好まづ長三三三三三打まの心  
 妙なるは烟もふれぬと人こそさう  
 ぬさぐり物もさうさむんぐりさるさう  
 頼しき心地もせしむく閑居さう  
 高根もを落つる水の火石といひを  
 かく湯やさるぞいひやしくさう  
 つくさうも晴れたまを元の  
 たかすかぬ風吹と白煙うぬ  
 ける梅の畧からして八日

京橋町油谷  
氏伊勢屋五方  
衛門ノ女子

此の志をばたきし里よりいづかき相見しをりとのりて  
うへに終り亭よりしぬべきものありを畧めしうゆとて  
かゝるまの馬川と度る下畧

此倭文とつら女子を江戸の弓町に住める某の女を真淵の門より寛延三  
年十八歳にして此池に書と後夫持ちしが寶曆二年七月廿歳に死すその  
遺文より此記并に消息文和歌ども集めて文布とつら一卷の寫本とあり  
傳よりり村田春道が寶曆八年の序にり真淵翁が倭文女の碑文も載せたを  
又本文假名文ありと多く  
漢字と交へ書きおたり

伊香保道の記

山岡明阿彌

上野の國伊香保より出湯にゆくと思ひ立つ畧十二日 寶曆十四年四月 今

日を伊香保より行きていづりぬをきき聞けをい嬉しく曉起きて  
出立つ此のまら 高寄 木曾のなるつぢあれど夜日す人の行きおひ

あげく略 元宿とやらんり山奥より便宜よりやま細き路より入里もて  
申るぞ又田舎なつものから野をゆき山谷にまゝをゆき  
柏木やりの里に書つ餉もの或人の物もひたれが鷹の卵累ね  
たるるぬーたるるもの木の葉より盛るるをりて来るをが家よりけり  
筈より盛るるもの成りてつじ此を里をたを程路遠し山も  
嶮しをどり略 勢うそ山路より入るゆより限あり遙かゆき心地  
す志の志を伊香保の山を眼の前に見ゆれを行く路を七尺の曲  
まら瓊のめく佩のむものたるるをりて似されど只後方より  
歩むが如く行きあづる略 屋よりやく高う登りゆより打願をれ  
を仰きえし高き樹もつしつは足底を見あられ向ひより見え赤城

の山も傍<sup>ついで</sup>りその中<sup>なか</sup>れを實<sup>じつ</sup>り遠<sup>とほ</sup>くも本<sup>もと</sup>よりなるといふところありて左<sup>ひだり</sup>の  
 田<sup>いな</sup>も右<sup>みぎ</sup>より移<sup>うつ</sup>りて奥<sup>おく</sup>深く行きゆくゆき水<sup>みづ</sup>澤<sup>さわ</sup>ゆるい所<sup>ところ</sup>より来<sup>き</sup>はるは  
 あらほも觀<sup>かん</sup>世<sup>ぜ</sup>音<sup>おん</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>ざつ</sup>立<sup>た</sup>したるうら瀧<sup>たき</sup>のせいのまを十<sup>じゅう</sup>石<sup>いし</sup>ありて川の  
 番<sup>ばん</sup>もつらつせうまう御<sup>ご</sup>寺<sup>てら</sup>とぞ御<sup>ご</sup>堂<sup>どう</sup>もこの段<sup>だん</sup>宮<sup>みや</sup>みまじしふとまきりく  
 しく見<sup>み</sup>ゆ略<sup>りやく</sup>ありて又<sup>また</sup>山<sup>やま</sup>を回<sup>まわ</sup>りて登<sup>のぼ</sup>りて右<sup>みぎ</sup>の方<sup>かた</sup>を尾<sup>お</sup>崎<sup>さき</sup>まで遠<sup>とほ</sup>く  
 や見<sup>み</sup>渡<sup>わた</sup>りて利<sup>り</sup>根<sup>ね</sup>川<sup>がわ</sup>を帶<sup>おび</sup>のぶと見<sup>み</sup>ゆ赤<sup>あか</sup>の度<sup>た</sup>き高<sup>たか</sup>野<sup>の</sup>の丘<sup>かみ</sup>谷<sup>たに</sup>に渡<sup>わた</sup>  
 りて細<sup>こま</sup>う千<sup>ち</sup>條<sup>じょう</sup>分<sup>ぶん</sup>をたると路<sup>ち</sup>の縁<sup>えり</sup>せりおまへたるといふその中<sup>なか</sup>に  
 人<sup>ひと</sup>馬<sup>ま</sup>も小<sup>こ</sup>う羣<sup>ぐん</sup>はるを蟻<sup>あま</sup>とりの蟲<sup>むし</sup>の熊<sup>くま</sup>野<sup>の</sup>詣<sup>ま</sup>をいりてゆるゆる似<sup>に</sup>ゆる  
 水<sup>みづ</sup>澤<sup>さわ</sup>といふをいづら水<sup>みづ</sup>もほそそと成<sup>なり</sup>りて又<sup>また</sup>向<sup>むか</sup>ひの丘<sup>かみ</sup>より上<sup>のぼ</sup>りて城<sup>しろ</sup>黒<sup>くろ</sup>  
 澤<sup>さわ</sup>といふ路<sup>ち</sup>をすぬを白<sup>しろ</sup>うもらぎ多<sup>おほ</sup>く此<sup>こゝ</sup>に水<sup>みづ</sup>無<sup>な</sup>浮<sup>う</sup>白<sup>しろ</sup>澤<sup>さわ</sup>をい

下二十九

こころいひにせむとちとさういふ言<sup>ことば</sup>ひもなほ斯<sup>ごと</sup>く行<sup>い</sup>く路<sup>ち</sup>の邊<sup>へ</sup>  
 の叢<sup>くさむら</sup>を分けさせらるる流<sup>なが</sup>る水<sup>みづ</sup>音<sup>ね</sup>聞<sup>き</sup>ゆ略<sup>りやく</sup>路<sup>ち</sup>ゆ人<sup>ひと</sup>の是<sup>こゝ</sup>を温<sup>ぬ</sup>泉<sup>いづみ</sup>乃<sup>なり</sup>  
 流<sup>なが</sup>の末<sup>すえ</sup>もを教<sup>し</sup>ふるがいと嬉<sup>うれ</sup>しくなれりて近<sup>ちか</sup>づきぬる城<sup>しろ</sup>にそれ  
 せちつ草<sup>くさ</sup>やしを坂<sup>さか</sup>路<sup>ち</sup>せ上<sup>のぼ</sup>りてその居<sup>い</sup>るべし家<sup>いえ</sup>すたり  
 はまね略<sup>りやく</sup>十三<sup>じゅうさん</sup>日<sup>にち</sup>朝<sup>あさ</sup>より日<sup>ひ</sup>高<sup>たか</sup>く起<sup>お</sup>きいで見<sup>み</sup>ゆむらせを四<sup>よ</sup>方<sup>かた</sup>にまらふ  
 める山<sup>やま</sup>を屏<sup>びん</sup>風<sup>ふう</sup>をえてたる状<sup>さま</sup>の山<sup>やま</sup>懐<sup>なつか</sup>り見<sup>み</sup>馴<sup>な</sup>れぬ家<sup>いえ</sup>ども多<sup>おほ</sup>く作<sup>つく</sup>  
 りてけり多<sup>おほ</sup>く湯<sup>ゆ</sup>浴<sup>よく</sup>もんとて入<sup>い</sup>りて来<sup>き</sup>し人<sup>ひと</sup>も老<sup>おい</sup>いたるも若<sup>わか</sup>く  
 もまらり行<sup>い</sup>きゆひもあすなり物<sup>もの</sup>商<sup>しょう</sup>人<sup>にん</sup>も夜<sup>よ</sup>日<sup>ひ</sup>をいりて入<sup>い</sup>りて来<sup>き</sup>るも促<sup>うなが</sup>  
 しるのまはるをいと珍<sup>めづ</sup>し略<sup>りやく</sup>斯<sup>ごと</sup>く日<sup>ひ</sup>數<sup>かず</sup>も経<sup>へ</sup>きをいりて徒<sup>た</sup>然<sup>ぜん</sup>り心<sup>こゝろ</sup>  
 のゆくりもあはれに打<sup>う</sup>連<sup>れん</sup>をまらり山<sup>やま</sup>空<sup>あか</sup>見<sup>み</sup>廻<sup>まわ</sup>りていりて



里の状を度々路を中にやまを多し相向ひて山を伴ひて作らば條  
 小路を十餘里二區開きたる表裏より作らば重なるを軒しはらへ  
 月そのまのちの中に楸を伏せし出湯を引きうけ右より左に細き算  
 湯浴むる人その槽より浸るる瀧屋に槽置たる瀧のめく落しかく  
 尾の長うは出でたる上より水作らばけりたまを路の石の坂し  
 て昇る障多此湯をその上つうこより遣るるあつれをせり  
 水の心はまよく低まに就きり流きゆく形り略その町のいと上  
 ち海人登るいふ多しを名より負ふ伊香保の神社立したまふ宮  
 居と物より神さびたり處の人を湯前大明神と申し奉るる名

下ノ二十

下ノ三十

略後より瑠璃光如来立したまふ略見ぬぐらせを御前なる  
 桃櫻の花もれ今を盛る咲きたるを以て詠し略そのまの法師の  
 庵より立ち入る物問ひあたまを小田舎人を珍しう物よく覺る  
 此御神の縁起もどほゆくと詠るるの挽物工のやりやをさる見  
 りいふあれどり種々の物乃形作らばせり略又此左の世人の翁  
 愁子醫師の才ゆきまをさるる山谷を求るる草木石塊も採る  
 きて末を略此のころを雨風あたまをさるる略夜をたけ安んじ  
 せはぬらる彼のよき吹けや宣ひしよ今もまと思ひ出でる伊  
 香保風はそれふまをいせぬをさるる名詠のふりひをさるる  
 まるりてまの月卯も立ちぬ日數も積まを歸るま程近りまを

今日明日出で立たん人々すつらつらの人とそぞろに惜みたり又来ん年も  
 かまふは家どいへぞまきつる別れごとくあがむれ惜しむれ此住する  
 家の常に凭居し柱の并のまれを今をやく宿離まぬもやのり  
 古言の付けしもいとをあげあま月四日不故郷とまの文も  
 了迎への人々来しむぎの空嬉し之今ハヤそそのつと多そ  
 略路を志の往々々家の向ひ谷より細き山路を登る嶮しうと  
 移る板せゆたくと切通しをどいつる空よりまはる左右の山の腹も  
 路も皆白土の碎けたるが凝鹽の散り霰の吹き寄せたる状も上  
 坂行ふぞ是元いと危く多しくし是を冬の程を以て寒き處に  
 皆氷子閑らしあまが春にあれど吹く碎け落つるやうとをいふまに

下ノ三十一

と過ぐれも高き廣野を行く山の尾岬遠う長う見やらうれを  
 志の住人里の家どもは梢のやまに見ゆら名残惜うて隠す  
 まを願のせせくろ三國の山草津の山をゆと雪の消残をう覺斑  
 子見ゆら行を盡せぞまあうたな假初の葉の條屋を立てり  
 人こらうらまち寄りて暫休ふゆや瘦せせらむら箱二人居て  
 なるる物語者背の山を相満の嶽並ぬら峰はくらつ嶽を出  
 にも出湯のありをて教ふまはる風れいと疾まを愛する時を今夏  
 の半あはれまて空の景色を更衣むのりの状を野山の草木  
 もをほり青みたるを尚枯まを砂まをらる茅蕪の高き中を  
 行くまら猪狼をどまを人々の悪しきを獣の晝も可やうとをいふ

未だ聞て予恐るし事以ては殊に行交人々を無  
 らぬがゆゑ心細く憂の状をいひつじりぬるも  
 未だ承物急が左の方より高と圓き山見ゆ  
 らしを沼端の富士  
 少ざりしとくや實に略その山富士を覺え  
 たり略その林麓にありし  
 行とて前も後方も傍ら皆山に立ちあがり  
 中れに思ひも  
 眼もまろり廣き池の山翠よりほる故  
 ちや藍なるも尚濃く  
 黒水をいひ状しりあぬ伊香保の沼を  
 多き水も  
 生ひず蒜あどいひもの見えは塵なき  
 池の中心清り澄き  
 里々底ひも知らぬぞ遠くえやま  
 ぞ漣波の向もよく未寄せて洗ふ  
 岸は渚を礫石のまはれ敷き  
 並みたりとて向の山も

一 向へる状し何の物恐るしと憂ふありし  
 ころの事聞て予は  
 くと供人々物問ひしきぞかしら  
 ち男也て未て言ひ教ふ  
 と榛名の御手洗を侍り昔此處領  
 らし人を木部の弾正某と  
 申しおその守の妻のひら花  
 せんやとて見ゆらむ此の池  
 のを道遙しるるの汀り立ち寄  
 りて吾をこの池せよ家にて  
 棲むるのまらる宿世の因あり  
 て假ふ人に見えたるあり今  
 歸るぬべき時ありぬその事  
 歸りてまに傳へしつづら  
 ち落まつりぬ御達従者ども  
 ちわて惑ひくとそ如何かせ  
 うといつたりせんす  
 ち八尋神の大蛇やふりて  
 ちこの失せぬといふ

此池の主なるては、ませは、いふところを捕らんと、綱引漁を  
 誤ちしも、まゝ、河あり、必雲起り、波風荒まき、火雨あど、降り、ゆると  
 聞らり、まゝ、雲が、ゆると、いひ、恐ろしく、そのまじの、塚あり、  
 以て、け、せ、ゆると、いひ、見ゆ、ゆると、山路せ、ゆると、行、細谷川  
 の石橋踏み、ゆると、尚行け、ゆると、程、ゆると、榛名の宮、ゆると、した、ゆると、  
 此面、ゆると、彼面、ゆると、た、石の、ゆると、み、時、ゆると、り、臂折、ゆると、た、ゆると、  
 又、ゆると、れ、宮、ゆると、楹、ゆると、太、ゆると、し、ゆると、ま、ゆると、ち、木、ゆると、た、ゆると、の、ゆると、  
 ぐ、打ち、ゆると、ゆると、鼓、ゆると、も、音、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、乙、ゆると、女、ゆると、  
 お、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 る、高、ゆると、籠、ゆると、石、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 塔の層、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 實に、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、

下ノ三十三

數、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 尚、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 吳、ゆると、服、ゆると、石、ゆると、山、ゆると、伏、ゆると、石、ゆると、地、ゆると、藏、ゆると、  
 獄、ゆると、彌、ゆると、陀、ゆると、が、ゆると、獄、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 斯、ゆると、書、ゆると、を、ゆると、數、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 危、ゆると、し、御、ゆると、垣、ゆると、の、ゆると、傍、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 三、ゆると、本、ゆると、の、ゆると、杉、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 名、ゆると、を、ゆると、聞、ゆると、に、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 文、ゆると、珠、ゆると、の、ゆると、淨、ゆると、土、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 獅子、ゆると、の、ゆると、行、ゆると、き、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 神、ゆると、主、ゆると、れ、ゆると、家、ゆると、並、ゆると、み、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 松、ゆると、枝、ゆると、の、ゆると、驛、ゆると、路、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 略、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 本、ゆると、文、ゆると、婦、ゆると、人、ゆると、の、ゆると、書、ゆると、を、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 假、ゆると、名、ゆると、の、ゆると、み、ゆると、の、ゆると、文、ゆると、を、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 今、ゆると、讀、ゆると、み、ゆると、易、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 漢、ゆると、字、ゆると、を、ゆると、交、ゆると、ゆると、明、ゆると、阿、ゆると、弥、ゆると、姓、ゆると、を、  
 伴、ゆると、名、ゆると、を、ゆると、後、ゆると、明、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、  
 幕、ゆると、府、ゆると、の、ゆると、道、ゆると、坊、ゆると、を、ゆると、真、ゆると、淵、ゆると、  
 門、ゆると、人、ゆると、あり、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、ゆると、

赤城紀行抄出

十八日大島甚三清高山彦九郎

安永二癸巳年十一月十八日大島甚左衛門所へ行つ大島氏の氏族と書留て旅宿へ歸り温泉に入

伊香保の神社へ禮服して參詣す町の南へ上り町屋とほくと東西あり前寺あり是を別當あり伊香保湯泉寺なり此社の上野國十二社の中にも伊香保の神社赤城神社一の宮の貫前の神社を大三座といひ外を榛名山を小九座といひ伊香保の神社今を正一位湯前大明神とて四十年計以前此号を以て神社寺僧乃守りたるすらよかゞどもに神号まを改むことを以て今も湯前の神号の時も吉田とて湯前明神別社と祀るべき由仰りし事大三社の其一と湯前の神に依り奉るを愚るが故とて神拜畢

下ノ三十四

其後藥師堂あり同じく南向なり是を別當湯泉山醫王寺なり神社と社領は

登榛名山記天明二年

平澤元愷

毛人屢稱榛山之勝今茲游四萬便道以四月二十日登略山在群馬郡距松枝驛三十餘里遙秀于百里外其高可知路唯阻滯夙出驛舍越風斷嶺晡時乃抵其麓略已抵山腹略唯有松杉夾道百尺千章于雲霄是可怡悅已復前二三里突兀巨石聳立路傍高出於松杉之上豈麻中之蓬者石耶抑松杉欲與石抗耶橫者架雲臥谿如屋梁如複道如尺蠖之將信愈登愈出所謂如巨象如狻猊如虎踞鳳翔腐語

他太平謂其  
既探妙義金  
洞之奇也

未足狀也。然我曹已飽太平。亦不易饜耳。神祠在巨石之間。磴道樓門。莊嚴殆罄廟貌。香火之盛。遂使山如此俗哉。豈人之佞神歟。將神之媚人耶。若不媚。何容佞者。求福之不回。豈有所不臻哉。問之祝司。乃曰。祀彥友尊。或曰美滿持尊。今祠稱滿行。其義未之詳也。傳說滿行事跡。陋滋甚。近時管轄東叡山云。神歟鬼歟。將佛陀歟。余卒不能辨。則不敢拜而下。若夫大黑岩。葛篋岩。龜甲岩。佛面岩。俯臨岩等。土人艷稱姑置。略維石巖。奇則奇矣。漫遊文章抄出

游船尾山伊香保記天明五年

同

今茲乙巳夏。余再游上毛。而主澁川村民田子正家。略遊船

下三十五

尾山。山一名富饒。距澀川村。半日程。與伊香保相連。略戲作其文曰。如是我聞。富饒山有飛泉。其高四萬由旬。登此觀望。世界悉見。風景微妙。不可思議。我從緣起。此日同遊。與大達尊者。大察沙彌。優婆塞等四眾俱。欲重宣此事。而作其記。先抵水澤。懋觀音堂。經行林中。遂至瀑布。一心除亂。咸皆歡喜。水聲深妙。令人樂聞。乃與四眾。食飯飲水。如是施與。甘露醍醐。身意益力。隨喜無量。勇猛精進。遂登山頂。慇懃賞嘆。忽發一意。為四眾故。游伊香保。山路甚艱。伊香保地。去年九月。災火蔓延。盡為火宅。熱湯涌出。如阿鼻獄。爾時我等。為病惱故。沐浴此湯。洗諸欲染。患難悉除。快樂潔身。饑渴頓來。周憶熱

伊香保誌

天香樓藏梓

悶。搏飯殘餘。相集食噉。呵々大笑。走出火宅。稚少遊戲。歡娛  
樂着。雖無寶車。隨其所欲。衆意非一。自在無礙。重經空野。日  
沒歸家。是時五月。十有三日。尊者為誰。良珊寺僧。優婆塞何。  
田子心等。我則免道山人也。漫遊文  
草抄出

平澤元愷稱五助  
寬政三年歿

仁泉亭記

在昔連歌師宗祇。浴此溫泉。命千明氏亭曰仁泉。其義取之  
溫泉能治病也。或曰。伊香保之地。稱村豪者。十有餘戶。各分  
視引溫泉。若取於泉。稱之仁乎。則比屋亦有焉。何獨以亭哉。  
曰然。然是以今視古也。伊香保之地。未知其所草創在何代。

也。萬葉之咏。既稱伊香保。則其所從來最尚矣。雖文獻不足  
徵矣。宅傳口碑。累世繇々。戶不更系。田不更主。僅々數民。居  
住湯源之地。千有餘歲。宗祇遊浴之日。以仁泉名此亭者。豈  
偶然哉。蓋宗祇親試湯泉有奇効。又親見發源之地及居民。  
皆悉為千明氏之有。而亭名遂以仁者。其形勢自使然也。其  
後元龜天心之際。郡屬武田氏。當是之時。千明氏嗣幼而母  
老。餘民相謀。告於有司。移村於今地。營業於溫泉。傳言天心  
四年。武田侯賜分地於七民。是也。七民乃水暮氏。岸氏。大島  
氏。後閑氏。望月氏。島田氏。千明氏也。又分為十四戶。各視引  
溫泉。官又定視法。使千明氏世為視心。又以發源之地為其

所持也。於乎宗祇以泉德名此亭。餘澤草闔村。以地則幽僻  
 山隈。以耕則瘠土獸害。其民則僅々十四戶。然而千數百歲  
 孫々相續。永與溫泉相終始者。亦泉德之餘慶。而吾毛中之  
 奇村哉。近來村中數罹災。古書舊區。悉烏有。於是乎。主人托  
 予以記。予向視宗祇之所書及先年宅址。今猶存于湯源。又  
 久知閼閼之所由傳。遂取筆應其需爾。享和三年三月。其

吉田芝溪名友直字子正上毛群  
馬郡澁川驛人墓在澁川新田

更衣日記

文政のちややせまの申の卯月朔の日上野の國大間とある古里へ行  
 と雖由、いれど伊香保の温泉の湯に孫子らりてを言ひたると

出でたのちの日を良人の大城へまゝ登り給ふやを後者おとすへ  
 ねやあふやとを朝とくを門出ししを略やうく午の刻も頃乘  
 物いそをせて立ちいぬ略三日よふく大間へ申すを湯着まぬ略  
 まてふしの春を榛名山をりやまの大御神の御戸開を給ふと  
 む伊香保の湯浴みながら話をもせまおしと人とそののち  
 くらり略同胞ありあつた人を案内して行くと幸やを定め  
 略略十二日伊香保へとて立ちいづ澁川の宿あり略の澁川  
 城立ちを一里のちありておしとを往來の人より遠く西  
 を以て障をめぐりておしとをゆりく高き山を向ひてを  
 と思へをいしうその山も後よりあつて又それよりあつて山



のひせゆく略すれは経ち伊香保の里に入らふその入る處  
 上層家の居るより雨の側より大なる主苑あり立ち並の  
 たるもえゆ木暮金をまやりの宿借るぬきの里に湯宿と  
 しが家十二ありとやそが中にもいの人をまをよけて豊ふら  
 家ありと聞かしの里より中を家の敷の中へゆきあをまを  
 ち落ちつきま疾く湯のしみをいれと急ぎ行かたす  
 見たり湯壺三つありれその壺の大きき壺のやまをいり  
 又ゆきの中瀧を落したるよりゆきの音また  
 聞きあれゆきとゆきゆしう覺ゆ昨日より雨のゆきも湯もぬ  
 せり略すれを入るをいんとやをら入るゆきのゆきを湯を

下ノ三十八

下ノ三十八

屋をいり肩を瀧をあたせぬゆきを略す食事とゆい  
 出ほをいれゆきと器を何よりゆき清らゆきの町に家と乃さ  
 むゆきゆき賑はし晝過ぎしゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 七饅頭ゆき折敷と茶のゆきゆき始ゆき宿にまらゆきゆき  
 ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 雨間ゆきゆきゆき見渡せば山と山と重なりゆきゆき霧は  
 ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 桃のさ咲き亂またり江戸をゆき標もゆきゆきゆきゆき  
 かくゆきゆきゆき卯月十日あり三日ありゆきゆきゆき  
 着るゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

湯の古言沿  
はまをれを  
のし眺まる  
かたのむこ  
沿端あり

かまへし侍ありぬ伊香保山出湯乃をそとふありて山の寒風あり  
是より四方山の景色は屏風ゆくらも立て並べたるやうあり明  
くはれをわけて榛名山へとあるまじうて路程二里半ありといふ  
一里登るや又れぞ平地なりてすあまて一里ゆくとす平地である  
けく来しと思ひしに向ひの方より大なる水海の又ゆるく鶴をよひ  
に平この山乃よと怪みつて行きて近とあるまじうて又れぞ大なる  
うやとも思ふ人々問ふをまきいなるをまきの乃ありといふまじ  
少くも池を乃とりてあつたの周を皆行くとす風出でてすを寒し  
かたのむこ男やもてくものむくを寒きこととすやまをぐくをのりち  
かみはくたはまゆくをのりて沼と淵ゆきとれありと名を大御神

下三十九

の湯を洗ひぬしおのむをそに高き山得ゆ形を富士子似たりあり  
問へば榛名のふじとをそとありて人々登ると名「曇りなき鏡」と  
もいふもまじく心清くもつる湯をその池乃周も過ぎぬとけりあり  
少し登るとありて鳥居ありと茶賣の家二軒ありとあり  
十八町ありといふ此地も見渡す景色いと好しとありて又れは御  
高籠岩と申すなりけりかくも呼ぶとふもふたふた異なる石を  
近き處はをいふなり仰ぎても見まきかじ遠き方より又れを高籠  
と後よりげたるんやうに名ゆつて行かす番所ありて杖をさす笠  
を杖をさすは行くとす石の階ありて登きを御社あり廣  
前よりくはれらるる尊とすといふふたの山を群馬の郡を居

まき本社満行権現鎮座したまふと名延喜式の椿名の社とあり  
 をあはれありとぞいつの原より椿名の文字とついでしや山の略図とつ  
 せ思ふや何れ乃詠みおけるは「松栢の梢むらさきを標名やま千  
 仞のついでをうけは平とてや書いつるなり實に某が岳何岩と名  
 づけ姿異あるは時を知らぬかまふやその名のついで  
 ちあるを覚ゆるもやむかづ中にも御姿岩をいつるを里人幣束岩と  
 いつ高きことを何丈とらふも知らずまや思ふも程の山を半より  
 ちみと覚しよとあたり大まある聲せたるやとてなり不思議ともわ  
 きまへんがはしその事導ぬれどもい何某の院との申す坊は百目  
 の間大行と修し満つる夜の月の刺す立つと谷ふさもつらとては名

下ノ四十

下ノ四十一

前の倭文女の記より

以て尊し御前せたまふ一町并も行けは鞍掛岩と申すやうなれば状  
 異ありそれより少し行きて山門のまをいれをいぞ御師町六十軒あど  
 ありといふれを伊香保よりまふ至りぬまの山の背と覚ゆることあり  
 登りて味しより前より番所といふ開口より社内より入ると思へど  
 ありを裏口より関を知らぬやう表乃りたるを南よりつて大鳥居より  
 二王門とやうく入り登りてやう繪圖のりて遠くをいれを記しや或  
 人の記は標名の山を以て神をいふより指をたてたる人ぬまのやま多  
 とて山峯をいふとあど画はしむこと見知らぬ状ありと記したるを  
 ことなるに「まのり」と標名の山を指すまをて神のまをいふこと  
 まよふまを伊香保へその日未過る路歸る路をいふと所をいれ見渡す

二岳の蒸湯  
伊香保湯  
と脈異ふなり

より二つ岳より高き山ふたつあり六の下の湯も出湯なりといふ事  
 伊香保の湯元ありまゝと相馬が岳の湯の以て高き山ふと見  
 えそ程もよう下の路を恐れしよ敷なりとと地獄谷といふ所  
 下をぬれど湯の沸き出づる敷へ落つといふ身の毛いぢるなり  
 予恐ろしとを窺ひもえん存なり急ぎて伊香保へ着きて暫休  
 らひて程もくらくて出でて流川より宿る  
 下略廿二日  
 江戸へ歸り

ふの記を余が祖母が書かれしより祖母を上野の國山田郡大間々の里正吉田  
 氏が女に先考殿翁の後母ありふの記をその母若乃田忌よりとて志をし  
 故郷へ歸省なりし時の事なり時より年五十七後慈光尼と稱し天保八年丁酉五  
 月十六日身まかり年七十おはしまし本文も假名書ふなりを今多く漢字加へり

伊香保志下卷 大尾

下ノ四十一止

伊香保ハ京河沼也産

こゝをめぐりて大尾の湯の湯の出づる湯の湯とて其湯の神は出湯と  
 してわたりしよりたゞりたりしたるを其湯とて其湯の湯を  
 伊香保とてよむなり其の湯の湯も其湯とて其湯の湯とて  
 其湯の湯も其湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて  
 守門の海雲が湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて  
 神の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて  
 男は子とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて  
 その湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて  
 湯乳の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて  
 わりて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて  
 よ湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて其湯の湯とて

九月十日... 大島嶋田永井... 岸... 後開... 天明... 福田... 木暮... 秋萍居士... 木暮樂山... 長命晏春... 大月栖霞... 佐々木熊二郎... 木戸小太郎... 國文社... 東京神田淡路町... 發兌... 國文社... 天守閣... 辛...

此書の内容...

大島嶋田永井 編者  
 秋萍居士  
 木暮樂山 補助  
 木暮樂山  
 長命晏春  
 大月栖霞  
 佐々木熊二郎  
 木戸小太郎  
 筆者  
 國文社  
 印刷工

發兌

東京神田淡路町

國文



明治十四年四月十日版權免許  
同十五年六月一日發兌

編輯人

大槻文彦

東京淺草區  
金町廿二番地

出版人

竹中邦香

同日本橋區  
兜町四番地

伊香

千明三郎

島田平八郎

保

岸六左衛門

島田次郎三郎

賣捌

岸權三郎

木暮武太夫

所

永井喜八郎

木暮金太夫

大島甚左衛門

木暮八郎

